



Title	原口剛・稲田七海・白波瀬達也・平川隆啓編著『釜ヶ崎のススメ』
Author(s)	渡邊, 太
Citation	宗教と社会貢献. 2012, 2(1), p. 77-85
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/19710">https://doi.org/10.18910/19710</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

原口剛・稲田七海・白波瀬達也・平川隆啓編著

『釜ヶ崎のススメ』

洛北出版、2011 年 10 月、四六判、400 頁、2,400 円＋税

渡邊 太\*

## 1. 釜ヶ崎という地域

大阪の繁華街は、大きくキタとミナミに分かれる。キタは J R 大阪駅（私鉄・地下鉄各線の梅田駅）を中心とするエリア、ミナミは、難波・千日前・道頓堀から心斎橋・アメリカ村まで広がるエリアを指す。梅田～難波間の距離は約 5 キロ程度である。東京の距離感でいうと、新宿～池袋間の距離にほぼ匹敵する（グローバル都市東京と比べると大阪はずいぶん小さい印象を受ける）。難波からさらに南に約 2 キロ、地下鉄で二駅程度、徒歩でも 20～30 分程度で、「釜ヶ崎」に辿り着く。ドヤと呼ばれる簡易宿泊所、立ち飲み屋、めし屋、弁当屋、コインロッカー、コインランドリーがひしめく風景のなかに、路上に座り込む中高年男性や野宿者の姿も見られる。最近では福祉アパートの看板も目立つ。フェンスに取り囲まれた公園と要塞のような警察署の建物も印象的である。

釜ヶ崎は、大阪市西成区の北東部、J R 新今宮駅の南側にあたる地域で、北は J R 線と平行する国道 43 号線（尼崎平野線）、東は阪堺線の土手と堺筋、西は南海本線の高架によって取り囲まれている。最寄り駅は、地下鉄・動物園前駅、J R 線および南海線・新今宮駅または南海線・萩ノ茶屋駅、阪堺線・南霞町駅または今池駅。釜ヶ崎の東には、飲み屋と商店が連なる飛田本通商店街や今池通商店街を含む太子エリア、さらに阪神高速を越えて東へ向かうと木造住宅やアパートがひしめく山王エリアがある。山王の東端は段差のある崖となり、その上に大阪市立大学病院と再開発が進む阿倍野の高層マンション群がそびえ立つ。山王の南部は遊郭として知られる飛田新地である。釜ヶ崎から北に向かつて J R 線を越えると、通天閣で有名な新世界に入り、観光客のにぎわいも見られる。新世界の東には天王寺公園と動物園の敷地が広がる。新世界からさらに北上すると、電器屋街として知られる日本橋の商店街にいたる。

---

\* 大阪国際大学人間科学部・講師 watanabi@taiyoh.org

釜ヶ崎は、日本社会の近代化とともに木賃宿がひしめく貧民街からはじまり日雇い労働者の寄せ場として発展してきたので、いまでも日雇い労働者の街というイメージが強いが、1990年代以降は長引く不況と日雇い労働者の高齢化により宿代を払えなくなった日雇い労働者の多くが野宿生活を余儀なくされてきた。また、1961年8月の第一次暴動以来、24次におよぶ暴動は、このまちを不穏な地域として連想させることにもなっている。釜ヶ崎に対する偏見、差別的な見方も根強い。

ところで、地図には釜ヶ崎という地名は見当たらない。なぜか、という問いから本書ははじまる。序章「釜ヶ崎という地名」によれば、明治末期の地図にはまだ釜ヶ崎という地名が記載されていた。当時、「西成郡今宮村字釜ヶ崎」の一带は、大阪鉄道（現在のJR関西線・環状線）と阪堺鉄道（現在の南海電鉄）の線路が走る他は一面に田んぼが広がる農地だった。その後、近代的都市計画によって、現在の日本橋界限にあたる長町の木賃宿街が解体され、移転された先が釜ヶ崎であった。「かつてありふれた地名だった『釜ヶ崎』は、木賃宿が移転されることで、いちやく有名になった。釜ヶ崎といえばスラム、といったぐあいに、この場所は、好奇心と恐怖心が入り混じったまなざしを注がれるようになったのである」（22頁）。1922年、町名改正によって釜ヶ崎という地名は変更されたが、木賃宿街を指す通称としての釜ヶ崎の名は流通しつづけた。

戦後、1961年の第一次暴動をきっかけとして「釜ヶ崎対策」が開始され、家族世帯の地域外への転出が政策的に進められ、大阪万博（1970年）の会場建設のため全国から単身の男性労働者が集められ、そのなかでこの地域に「あいりん」という名前が付与された。以後、新聞・テレビでは、釜ヶ崎は「あいりん」と呼ばれることになる。しかし、「あいりん」という地名は都市政策のなかで「行政によって上から押し付けられた名前」（29頁）であるため、労働運動や支援団体はこの名称を用いず「釜ヶ崎」と呼ぶ。その一方で、地域住民にとってはマスメディアによって広められた暴動のまちというイメージを払拭するために頼らざるをえない言葉でもあり、この地域に「亀裂」を刻む言葉でもあった。

## 2. 本書の構成

本書は、釜ヶ崎の歴史と現在について多様な視角から記述するものである。執筆者には、地理学・社会学・歴史学などを専門とする研究者の他に、宗教者、漫画家、音楽家、支援者など、様々な立場が含まれている点特徴的である。以下、本章の内容を簡単に紹介する。

序章「釜ヶ崎という地名」（原口剛）は、先に述べたとおり地図に記載されない「釜ヶ崎」という地名の謎を手がかりとして、この地域の近代史を概観している。

第1章「建設日雇い労働者になる」（渡辺拓也）では、労働社会学を研究する著者が建設業の日雇い労働者として働いた体験をもとに、準備すべき道具や仕事の見つけ方、現場での仕事のコツなど、素人が日雇い労働者になるためのハウツーをわかりやすく魅力的に描いている。

第2章「釜ヶ崎の日雇い労働者はどのように働いているのか」（能川泰治）は、高度経済成長期を日雇い労働者として、港湾での冷凍食品の荷役（マイナス25度の船倉と外気の温度差が激しく健康が蝕まれる）、ダム建設（1956年竣工の佐久間ダムでは労災死者96名）、北陸の雪下ろし（1950、60年代は命綱など滑落防止の工夫がなく危険な現場）、大阪の大手企業の工場清掃（夜業、大けがを負って退職）などに携わって生きてきた3名の事例から、日雇い労働の実態をあきらかにする。日雇い労働者は、景気や天候・季節によって需要が大きく左右される危険で過酷な仕事に携わり、需要がなくなれば切り捨てられる。その仕事はビル・道路・電気などの生活インフラや安価な冷凍食品などを通して私たちの日常生活を最底辺から支えるものだった。

第3章「釜ヶ崎の住まい」（平川隆啓）では、日雇い労働者たちの住まいとなる簡易宿泊所をめぐる歴史と現在が描かれている。簡易宿泊所は、標準的な三畳一間で1泊1000円～1500円が相場。仕事に応じて生活の場を転々とする日雇い労働者にとって便利な宿である。戦後、1960年代までは日雇い労働者の多くは家族生活を送っていたが、1961年の第一次暴動をきっかけに行政が動き、家族世帯を対象に地域外の公営住宅を斡旋する移住対策が進められる一方で、大阪万博建設に向けて一畳個室の簡易宿泊所が急増し、釜ヶ崎は単身の日雇い労働者のまちになった。1970年代から1980

年代にかけてビルへの建て替えも進められるが、1990年代以降は空き部屋が目立ちはじめ、2000年代には福祉アパートや外国人旅行者（バックパッカー）受け入れなど新たな動きが見られる。

第4章「釜ヶ崎の歴史はこうして始まった」（加藤政洋）は、ドヤの祖型といえる近世の木賃宿の系譜をたどり、明治期の都市政策（スラムクリアランス）によって長町（現在の日本橋付近）の木賃宿街が消滅し、墓地と刑場が移転された後の鳶田（飛田）に木賃宿街があらわれ、街道の西側にまで展開されたことで木賃宿街としての釜ヶ崎が形成された経緯をあきらかにする。

第5章「ドヤと日雇い労働者の生活」（吉村智博）は、社会調査資料をもとに戦前の日雇い労働者の生活を描いている。1920年調査によれば、日雇い労働者の多くは「無技術」「未熟練」で仕事は一定せず、稼いだ金は飲食店で浪費され、家計は赤字。また、1929年調査によれば、昭和恐慌により長期失業者が増加している。1930年代半ばから、日雇い労働者を町内会に組織する動きが警察や町内の有力者によって進められ、戦時中は引く手あまたの日雇い労働者の賃金が急激に上昇した。生計を維持できる基礎ができ、生活が安定すると戦争協力への自覚が促され、日雇い労働者も戦争体制に参加していくことにもなった。

第6章「日雇い労働者のまちの五〇年」（海老一郎）は、高度経済成長期からバブル崩壊以降までの日雇い労働の歴史を記述する。1960年代前半まで青空労働市場で労働力の取引がおこなわれていたが、ピンハネと暴力行為が日常茶飯事であった。1962年に財団法人西成労働福祉センターが設立され、労働条件の明示と各種の相談事業がおこなわれた。1970年にはあいりん総合センターが開設され、青空労働市場は解消されたが、行政の管理指導のもとで求人者と求職者が直接面談する「相対方式」は維持された。1990年代後半以降、大規模公共事業費が削減されるなかで日雇い労働者は仕事を失った。

第7章「騒乱のまち、釜ヶ崎」（原口剛）は、1961年からの暴動に焦点を合わせて釜ヶ崎の政治文化を描く。度重なる暴動のなかで労働組合運動が出現し、白手帳（日雇雇用保険手帳）を勝ち取り、1970年にはメーデーが実現した。1972年には暴力団との闘争のなかから釜共闘（暴力手配師追放釜ヶ崎共闘会議）が結成され、三角公園での夏祭り開催によって暴力団

から公園を奪い返した。世界的不況が襲った1973年以降は、仕事が途絶える年末年始の極寒のなかの野宿を支える越冬闘争への取り組みが継続されてきた。こうした運動の積み重ねによって、釜ヶ崎の日雇い労働者の労働と生活を支えるセーフティーネット構築にいたる政治文化が形成されてきたのである。

第8章「失業の嵐のなかで」（松繁逸夫）は、1990年代以降のホームレス増加に対する反失業運動の取り組みを紹介している。釜ヶ崎反失業連絡会は、大阪府・大阪市に対してホームレス対策を要求し、野宿を可視化させる集団野営闘争によって成果を獲得してきた。1999年にはNPO法人釜ヶ崎支援機構が設立され、緊急雇用創出基金を活用しての事業規模は拡大しているものの、ホームレス対策はまだ十分とはいえず、就労による野宿の解消が実現困難ななかで生活保護の適用が増加している。

第9章「釜ヶ崎の『生きづらさ』と宗教」（白波瀬達也）は、釜ヶ崎における宗教活動を概観する。戦前から釜ヶ崎に入っていたキリスト教は、1970年代以降、労働運動と共闘する釜ヶ崎キリスト教協友会が活躍するが、1990年代以降は伝道を中心に活動するグループ（とりわけ新たな信者形成を求める韓国系プロテスタント教会が積極的）も展開してきた。ホームレス伝道と呼ばれる伝道集会では、身体レベルで教えを内面化させる賛美歌が重視される。牧師・伝道師のメッセージでは、人間の弱さが強調され、苦難の理由は「罪」という言葉で説明され、悔い改めることで苦難からの解放が可能になると説かれる。信仰を得た元ホームレスの「証し」も頻繁に語られる。伝道集会に参加するホームレスは、集会で提供される食事を目当てにハシゴすることも珍しくない。近年は、生活保護制度の適用が進み極限的な貧困が緩和されるなかで、孤独死の日常化に象徴される孤立・孤独が新たな「生きづらさ」として顕在化している。そのなかで葬送支援をはじめ伝統仏教の参画が活発化し、キリスト教中心だった釜ヶ崎の宗教分布は変わりつつあり、いまや「宗教の寄せ場」となっている。

第10章「変わりゆくまちと福祉の揺らぎ」（稲田七海）では、2000年代以降、高齢の生活保護受給者が急増し、福祉のまちへと変貌する釜ヶ崎の現在を描いている。1999年に釜ヶ崎のまち再生フォーラムが設立され、生活保護を利用して居住の安定を図り、その後の生活をサポートする支援策を提唱した。宿泊客が減少した簡易宿泊所を生活保護受給者のための「サ

ポータティブハウス」に転換する試みがはじまり、2000 年代を通じて簡易宿泊所から転用された福祉アパートが増加した。しかし近年、悪質なピンはね業者が参入するという「貧困ビジネス」問題も起きている。

第 11 章「外国人旅行者が集い憩うまち釜ヶ崎へ」（松村嘉久）は、1990 年代以降、日雇い労働者の宿泊が減少するなかで、簡易宿泊所の新たな顧客として外国人旅行者が誘致されてきた経緯をあきらかにする。2005 年には、大阪国際ゲストハウス地域創出委員会（OIG）が結成され、外国人旅行者の存在を活かしたまちづくりをめざし、多言語パンフレット『大阪の安い宿』を作成するなど、外国人旅行者の誘致に取り組んでいる。2009 年には産学連携（「民設学営」方式）で「新今宮観光インフォメーションセンター」が開設され、学生ボランティアを中心に運営されている。

本書には、以上の 11 章に加えて、敗戦直前から現在までの釜ヶ崎の変遷を描いたイラスト「釜ヶ崎いまむかし」（ありむら潜）、19 世紀前半から 1980 年代までの地図と航空写真を比較することで釜ヶ崎の地理的変遷を記述する「地図のススメ」（水内俊雄）、釜ヶ崎を描いた映画・漫画・小説を紹介する「ひきだしのなかの釜ヶ崎」（水野阿修羅）、さらに、「子」（荘保共子）、「音」（SHINGO★西成）、「酒」（村松由起夫）、「老」（川浪剛）、「信」（本田哲郎）、「芸」（原田麻以）をテーマとする各コラムが含まれている。

### 3. 本書の特徴

表紙からして洗練された印象を与える本書を開くと、写真と地図の豊富さにまず目を引かれる。「地図のススメ」は異なる年代の地図を時系列に並べることで、この地域の変遷をあざやかに描き出しているし、第一次暴動の主たる蟬集場所を記した第 7 章の地図は、群集が警察施設の周りに集中していたことから自然発生的な暴動が警察に対する抗議の表現であったことを明瞭に示してくれる。いずれも地図のもつインパクトが見事に活かされている。また、写真は釜ヶ崎というまちの個性を表現するとともに、しばしば否定的なまなざしで捉えられがちなこの地域がもつ文化的な魅力も表現している。

専門領域の異なる複数の著者が、それぞれの視座から釜ヶ崎を描いてい

る点も本書の大きな魅力である。一つの地域を対象に異なる分野の著者たちがそれぞれの視角から記述し一冊の書籍にまとめることは、異種混交的共同研究のモデルとしても魅惑的である。山谷（東京）や寿町（横浜）など他の寄せ場についても、このような本が書かれれば読みたいし、寄せ場以外の地域についても適用できる方法論であるだろう。

また、『釜ヶ崎のススメ』という本書のタイトルおよび各執筆者の文体にあらわれているように、本書の著者たちは釜ヶ崎に対して何らかの思い入れをもち、様々なかたちでコミットしながら文章を書いている。コミットメントの仕方はそれぞれ異なるであろうし、必ずしも統一されている必要はない（文体がバラバラであることも本書の大きな魅力である）。古典的な意味での学問研究を踏み越えているともいえるが、社会的現実には踏み越えなければ表現できない側面があることも確かである。かかる方法論はまた、記述と介入の関係を考えさせる問題提起でもあり、実践的な研究はこの問いを回避することはできない。

#### 4. 釜ヶ崎の近代

釜ヶ崎といえば、高度経済成長期には日雇い労働者のイメージ、バブル崩壊以降はホームレスのイメージが強いかもしれないが、本書は労働と失業（その結果としての野宿）だけでなく、生活、住居、政治、社交、宗教、福祉、観光（生活様式の総体としての文化）を多面的に描いている。そのような多面的な記述を通して浮かび上がってくるのは、釜ヶ崎というまちの歴史であり、現在の釜ヶ崎もまた変化の渦中にあることである。

釜ヶ崎は、まちがいなく日本近代史の一つの側面を代表している。本書を読めば、釜ヶ崎が日本社会の近代化とともに発展してきたことがよくわかる。近代初期にスラムクリアランスの結果として市外に放逐された都市下層民の木賃宿街として出現した釜ヶ崎は、戦後、高度経済成長期には大阪万博建設をはじめとする開発のための労働力供給源としての役割が期待され、単身の日雇い労働者のまちとなる。度重なる暴動のなかでセキュリティ強化が進められ、公園はフェンスで封鎖された。バブル崩壊以降は長期失業者が増大し、生活保護受給世帯も増大したが、福祉はまだ十分とはいえない。



釜ヶ崎は、自然史的発展によって生まれたのではなく、近代化を推進する政策にそのつど翻弄されながらつくられてきたまちである。その意味で、釜ヶ崎は「すぐれて政治的な場所」(184 頁)なのだ。ただし、釜ヶ崎の人々が政策に翻弄されるだけの受動的な存在だったわけではないことに注意しなければならない。釜ヶ崎では、労働運動をはじめとする様々な運動体が自前のセーフティーネットを構築し、施策を求めて行政に働きかけてきた。これら抵抗の文化もまた、釜ヶ崎を理解する上で重要な要素である。それは、労働環境がなし崩し的に悪化し、自己責任の論理が強調されて個人化が進むなかでセーフティネットが瓦解し、決定的な局面で他人に頼ったり助けを求めたりすることが困難になりつつある社会のなかで、いかにして社会的関係を再構築するかを考える上でも大いに参考にすべきであろう。

## 5. 変化のなかの釜ヶ崎

「あとがき」によれば、本書の編者らは「釜ヶ崎のまち再生フォーラム」をつうじて出会い、本書の出版を企画することになった。編者らは、釜ヶ崎資料センター編『釜ヶ崎—歴史と現在』(三一書房、1993 年)に導かれて多くを学んだが、「この二〇年間の間に、釜ヶ崎をめぐる状況は大きく変わった」(376 頁)こと、そして研究の進展によって新たな知見がもたらされてきたことをふまえて、新しい入門書づくりを目指したという。1990 年代からはじまり現在も変化しつつある釜ヶ崎の動向は、とりわけ、第 8 章から第 11 章において、失業、宗教、福祉、観光の視点から詳しく記述されている。

バブル崩壊以降の不況と、日雇い労働者の高齢化により、労働参加による生計の維持が困難になった長期失業者たちが野宿化するなかで、反失業運動はホームレス支援と行政に対する要求をおこなってきた。ホームレスに対する生活保護適用の適正化に関する厚生労働省の通達(2003 年)以降、生活保護受給世帯が増加している。そのなかで、まちづくりグループと簡易宿泊所が連携し、サポーターズハウスによる住宅支援を開始してきた。また、宿泊者の減少で経営危機に直面した簡易宿泊所のなかには、外国人旅行者を新たなターゲットとして観光によるまちづくりへの取り組む動き

もみられる。

日雇い労働者の長期失業化、ホームレス化と高齢化の傾向によって、釜ヶ崎の宗教活動も新しい局面を迎えることになる。労働運動と連携した従来の「運動型キリスト教」とは別に、ホームレス問題が顕在化した1990年代からホームレス伝道を主とする「布教型キリスト教」が出現してきた。長期化する失業と寄せ場の縮小によって、労働運動が釜ヶ崎の人々の実存的問題にこたえることが難しくなるなかで、「苦難の意味づけ」を「自己の内面」に求めるホームレス伝道が台頭する。とりわけ高齢化し、リアルに死が迫った人々にとって「生の意味」が希求される(297～298頁)。「支縁のまちサンガ」をはじめとして、2000年代後半から活発化している仏教者によるホームレス葬送支援の活動は、高齢化が進む釜ヶ崎での新しい宗教的欲求に対する応答としてとらえることができる。かかる宗教活動の変化もまた、釜ヶ崎というまちの現在をあらわしている。

折しも、2011年12月に就任した橋下徹・大阪市長は、西成区に子育て世帯を呼び込む「西成特区構想」を発表し、西成区長を中心とするプロジェクトチームが2012年2月に発足した(大阪市報道発表資料)。釜ヶ崎もまた大きな政治の流れにまきこまれている。「西成特区構想」のなかで、日雇い労働者や元日雇い労働者は、どのようにあつかわれるのか。活動家、支援者、研究者らはそこでどのような役回りを演じることになるのか。今後の動向に注目したい。